ストレスフルな出来事の特徴と意味づけ動機

—場面想定法を用いた基礎的検討—

○上條菜美子¹・湯川進太郎²

(¹ 筑波大学大学院人間総合科学研究科・² 筑波大学人間系)

キーワード：意味づけ、ストレスフルな出来事、脅威評価

Characteristics of stressful events and motivation to make meaning

Namiko KAMIJO¹ and Shintaro YUKAWA²

(¹ Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ² Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba)

Key Words: meaning making; stressful events; threat evaluation

目 的

ストレスフルな体験を乗り越える一つの対処法として、近年、「意味づけ」が注目されている。これまでに、誰しもが必ず意味づけを行うとは限らないことや (Davis & Morgan, 2008) 出来事の種類によって意味づけの過程は異なる (Park, 2010) ことが指摘されている。このことから、出来事の特徴のような特徴が、意味を見出そうという動機づけに繋がるのかを明らかにする必要があると考えられる。本研究では、ストレスフルな出来事に対する脅威の主観的評価 (脅威評価) が、体験者の意味づけを動機づける (意味づけ動機) 要因として作用するとともに、その出来事によって生じる自身の変化 (自己の変化) を予測しやすくさせるという仮説を立てる。さらに、脅威評価を規定する要因として、未然防止性 (その出来事を未然に防ぐことがどの程度できたと思うか)、生起可能性 (その出来事は一般的にどのくらいの頻度で発生すると思うか)、その出来事から生じる不快感の 3 要因に焦点を当て、各要因と脅威評価が意味づけ動機や自己の変化とどう関連するかについて検討する。

また、本研究では、多くの意味づけ研究が扱っている回顧法ではなく、物語性 (状況や文脈の説明) を持った多様な仮想場面を用いた場面想定法を取り入れる。これにより、ストレスフルな出来事の体験内容を統制し、ストレスフルな出来事が体験者の意味づけにもたらす影響や、それにかかわる要因をより一般化した形で提案することが可能であるとする。

方 法

調査協力者 関東の国立大学に所属する大学生および大学院生 20 名 (平均年齢 22.32±1.46 歳) に調査協力を求めた (分析にはローデータをため、最終的にサンプル数は $n=190$ となった)。

仮想場面 本研究で使用する場面を作成するにあたって、Taku et al. (2007) の出来事カテゴリーに依拠し、5 つのカテゴリーからなる 10 の仮想場面を作成した。

調査手続き 仮想場面の提示および質問は全て紙面上で行った。仮想場面は 1 場面ずつ提示し、その都度、場面に関する質問に対し回答を求めた。なお、場面はカウンターバランスをとるため、ラテン方格式で提示し、回答者はひとり 10 場面ずつ回答し、順序効果を相殺した形で各場面を 20 名が回答するよう配置した。

調査項目 (1) 経験の有無：「あなたはこの出来事と同じ、もしくは似たような経験をしたことがありますか？」(倫理的配慮および調査協力者の統制のため、「ない」と回答した者にはのみ、その出来事に対する回答を求めた。) (2) 未然防止性：「もしあなたなら、こういう経験をしたとき、この出来事はどのくらい未然に防ぐことができたと思いますか？」 (3) 生起可能性：「この出来事は、実際はどのくらいの頻度で起こることだと思いますか？」 (4) 不快感：「もしあなたなら、こういう経験をしたとき、どのくらい不快な気持ちになると思いますか？」 (5) 脅威評価：「もしあなたなら、こ

ういう経験をしたとき、この出来事をどのくらい脅威に感じますか？」 (6) 意味づけ動機：「もしあなたなら、こういう経験をしたとき、この出来事がなぜ起こったのかという理由や、この出来事が起こった意味などを、自分から見つけ出そうとしますか？」

(7) 自己の変化：「もしあなたなら、こうした経験をするによって、自分自身が大きく変わると感じますか？」。なお、脅威評価のみ 0~100 で任意の点数をつけるよう求め (数字が大きいほど脅威だと評価)、その他の項目は 5 件法で測定した。

結果と考察

脅威評価と意味づけ動機の間に強い関連がみられると予想していたが、弱い正の相関にとどまる結果となった ($r=.18, p<.05$)。意味づけ動機をみると、未然防止性との間に中程度の正の相関 ($r=.43, p<.01$)、不快感および自己の変化との間に弱い正の相関がみられた (順に、 $r=.19, p<.01$; $r=.17, p<.05$)。一方、脅威評価をみると、不快感および自己の変化との間に中程度の正の相関 (順に、 $r=.50, p<.01$; $r=.49, p<.01$) がみられた。

次に、共分散構造分析により、全ての変数間の関連を検討した。その結果を Figure 1 に示す (有意ではなかったパスおよび誤差分散の図示は省略し、相関係数および有意であった標準偏回帰係数のみを掲載)。なお、データに対するモデルの適合度は極めて高い値を示した ($\chi^2(3)=2.18$ ($p=.54$), GFI=.99, AGFI=.97, CFI=1.00, RSMEA=.00)。

分析の結果、未然防止性が高いほど、意味づけ動機は促進されることが示唆された。このことから、「この出来事は未然に防げたはずだった (のに防げなかった)」というような、後悔や自責の念が、意味づけを促す可能性があると考えられる。さらに、生起可能性と不快感は脅威評価は自己の変化の予測因であることが示唆された。つまり、人は強く不快を感じ、自分には起こり得ないだろうと予測するような出来事を経験したとき、その出来事を脅威だと評価し、自分自身に大きな変化をもたらさだろうと予測しやすくなると考えられる。

Figure 1 意味づけ動機に影響を及ぼす要因の検討

引用文献

- Davis, C. G. & Morgan, M. S. (2008). *Rehabilitation Psychology*, 53, 128-138. : Park, C. L. (2010). *Psychological Bulletin*, 136, 257-301. : Taku, K., et al. (2007). *Anxiety, Stress, & Coping*, 20, 353-367. : 宅香葉子 (2010). *腫瘍内科*, 5, 211-217.